

## 民俗博物館設立運動の記録

林道明氏史資料保存プロジェクトの経過報告

杉本 浄

Records of the Movement to Establish a Folk Museum

A Report on the Project for the Preservation of Historical Materials Left by the Late Domei  
Hayashi

SUGIMOTO Kiyoshi

### 0. はじめに

本稿は 2020 年度および 2021 年度の学部教育研究補助金を得て、新潟県佐渡市で行った史資料保存調査の経過報告である<sup>1</sup>。対象となった史資料は同市小木地区の宿根木集落にある佐渡國小木民俗博物館の創設と初期の運営に深く関わった林道明（1913-1989 年）氏（以下、敬称略）が残したメモ帳、日誌、書簡、スクラップブック、勉強ノート、各地の研修旅行のノート、博物館関連行事綴などである。生前の林はメモ魔と言われ、例えば食事中に、傍らにあった割りばしの袋やナプキンにもメモ書きしたと伝えられている<sup>2</sup>。今回の調査期間においては、その膨大な史資料群から、1960 年代後半から 1980 年代はじめまでの、博物館準備から設立当手を明らかにするノート類や博物館関連のメモや印刷物を束ねた資料を中心に、スキャナー機材を使った紙資料のデジタル化とともに、その内容をデータベース化し、整理する作業に力を入れた。

ここで史資料の持ち主であった林道明について、あらかじめ触れておきたい。林は 1913（大正 2 年）に、当時の愛媛県喜多郡内子町内子に生まれた。家は曹洞宗の禪昌寺である。旧制大州中学校に学び、僧籍を得るため神戸の時宗の寺に修行に入った。得度した後は、浅草の日輪寺を経て、1936（昭和 11 年）に無住になっていた宿根木の称光寺に入山した。兵役のため 7 年ほど寺を離れたが、1950（昭和 25 年）に復員。宿根木に戻った林は、住職の傍ら小学校の先生たちと近隣集落の琴浦で青年を集めた夜学を運営した。さらに旧小木町の民生委員や公民館活動に尽力し、公民館館長を長らく務めた。1960 年代に小木町史の編纂に関わり、後に文化財保護審議委員長にも就いた。林はこうした一連の活動を通じて町の歴史や民俗に関心を深めていったようである<sup>3</sup>。1962 年（昭和 37 年）に公民館活動の一環のため、地域開発の助言を得ようと民俗学者の宮本常一（1907-1981 年）氏を招待したことが縁で、その後生涯にわたっ

て宮本の指導を受けることになった<sup>4</sup>。

そうした2人の交流の結晶が1972（昭和47）年6月に開館した民俗博物館だった。閉校になった宿根木小学校の校舎に老人クラブの力を借りて、使われずに納屋にしまわれていた民具を集め出した。1969年頃から学生運動の影響もあり、若者たちが宿根木や琴浦周辺に集まり始めており、こうした若者たちの助力を得ながら、博物館の開館に心血を注いだ。開館後は自ら館長として博物館の運営にあたり、宮本の指導により集めた船大工道具及び磯舟資料968点が1974（昭和49）年2月に、南佐渡の漁携用具1293点が同年11月に国の重要有形民俗資料（当時）にそれぞれ指定された。さらに林は宮本と彼を取り巻く若者たちの力を借りて、日本海大学講座を同年9月に博物館主催で開催し、日本生活学会の第2回大会（1976年7月）、日本民具学会の第4回大会（1979年9月）を小木町に招致し、博物館をこうした活動の拠点に用いた。林は博物館活動を通じて、他に新潟県民具学会会長などを歴任している<sup>5</sup>。



写真1 1972年6月14日、佐渡國小木民俗博物館開館記念式典にて、会場の宿根木公会堂前で談笑する林道明氏と宮本常一氏（林道明写真アルバムより）

## 1. 調査の経緯

林の史資料保存に本格的に着手したのは2015年7月の下見調査からである。当時、佐渡市全体の博物館を統括する佐渡学センターのセンター長で、民俗博物館などで長らく町の職員を務めた高藤一郎平氏の指揮の下で資料調査が開始された。まずは、林のご子息の道夫氏から合意を得て、称光寺本堂内の棚にあった資料ボックスを整理のために民俗博物館の一室に移動させた（ただし、資料のすべてではなかった）。翌8月に学生3名に教員2名を加えて1週間にわたり博物館において整理作業を行った。この時は資料の全体像をつかむことが目的とされ、加えて宮本常一との関わりを示す資料の探索に重点が置かれた。まずは、ボックスの中の資料や文書を取り出して、その中身を確認しながら大雑把に分類・整理した。デジタル化については、手の付けやすい大量の写真アルバムと日めくりカレンダーに書かれた日誌、さらにははがきや手紙を対象に行った。とはいえ、資料の量が膨大であったため、期間中に全体を網羅するま

では至らず、肝心の宮本常一関連の資料で発見できたものはごく一部に留まった<sup>6</sup>。

その後、2018年夏に再度称光寺本堂に入り、部屋の整理とともに資料を探索した。調査の最後で、課題であった宮本常一からの手紙類や民俗博物館設立関連の資料をようやく見つけることができた。それらをデジタル化するために博物館に移動させたが、分類のために写真を一部撮っただけで、スキャナー機材を使用したデジタル化の作業はほとんど行えなかった<sup>7</sup>。

## 2. 資料保存プロジェクトの再開

2020年にこれまで10年以上続けていた合同の実習調査が、コロナ禍で学生を連れていくことができなくなった<sup>8</sup>。そのためこの年の夏に予定していた宮本常一写真を使ったフィールド調査、銀河芸術祭の出展、小学生向けのワークショップ（夏学校）も中止になった。

この状況下でやれることは何かを問うた結果、中断していた林の史資料保存プロジェクトを集中して行うことに決めた。資料整理とデジタル化であれば、ある程度隔離された部屋で人との接触を最小限にして作業ができるため、感染対策の面で問題がないと考えた。普段の調査では、同時進行で行われる企画物や教育指導などに労力と時間がどうしても取られてしまうため、デジタル化のような地道な作業に集中することは難しかったのである。

こうして2020年8月19日から30日の間に単身で現地調査を行った。しかし、7月末に佐渡市で最初の新型コロナウイルスの感染者が島内から出た影響で、お盆中に帰省を予定する人たちに向けて市長自らが延期を呼びかけるような難しい状況にあった。島外の人たちに対して、島内の人々からの厳しい目が向けられていた中での調査になった<sup>9</sup>。そのため日程の前半は佐渡中央図書館での資料調査にあてることにし、後半より保存作業の準備にかかった。まずは、作業スケジュールを協力者の高藤氏と話し合った。この中で、集中的なデジタル化の作業は翌年の3月に行うことに決め、宮本常一写真プロジェクトの今後やその他の企画について、おおよその見通しをたてた<sup>10</sup>。



写真 2 2021年3月10日、佐渡國小木民俗博物館新館のはんぎり茶屋での作業模様  
(著者撮影)

つづいて2021年3月8日から14日間に当該年度第2回目の調査を行った。この時は集中的に作業をするために、博物館に歩いていける宿泊施設を確保し、スキャナー3台を駆使してデジタル化を行った(写真2)。この時にデジタル化できたのは、林道明宛の重要書簡、博物館立ち上げに関する資料、博物館や民具学に関するノート類、さらに館長になる直前の公民館長時代のメモや書類だった。これに加え、高藤氏が民俗博物館を整理する中で見つけた、林道明氏存命中に机の周りに置かれていた資料が段ボール箱から出てきたため、その中身を確認して、重要と考えられる博物館関連の書類の束をデジタル化することにした(写真3)。特に、1974年9月に当博物館で開催された日本海大学講座の企画書から実際の講座が開催された際のメモが見つかったことは、今後の当該博物館の歩みを知る上でも朗報でもあった。最終的におよそ2000枚分のスキャンニングを終えることができた。



写真3 2021年3月11日、新たに博物館内で見つけた林道明氏関連の資料(著者撮影)

### 3. 保存史資料の内容整理と項目づくり

2020年度に行ったデジタル化により、一部の資料を除いて、林道明氏の博物館設立前後の重要文書についてはほぼスキャンニングの作業が終了する目途がたった。次の段階として、将来的に公開するための基礎的な作業、つまりこれらのデジタル化した資料や文書類のデータを再度現物と照らし合わせながら確認し、同時にエクセルに資料の日付と内容の要約を付したデータベースを構築する必要がある。また、これまで行った作業の中で、不鮮明な画像データや画素の低くて粗い画像データについては、再度スキャンを取らなければならなかった。こうして、つづく2021年度はデータベース構築と画像チェックの作業に最大限集中することになった。

最初の作業は2021年8月18日から28日の間に博物館で行った。次ページの表1にあるように、資料番号、資料タイトル、著者、内容、形状、総ページ数の項目をたてて、データベースを構築することにした。期間中にデータベース化できた資料文書は、宮本常一による博物館展示指導の手紙類、林の博物館創設までの委員会の書類とメモ、創設後の活動記録などである。

また、同様の作業を「さどの島銀河芸術祭」の出展のために再び佐渡を訪れた9月8日から18日の間にも、14日と16日の2日間行った<sup>11</sup>。



写真4 2021年8月21日、データ記入作業中。終わった資料から分類の袋に整理（著者撮影）

表1 史資料の整理状況 分類番号0001から0006

分類番号	資料タイトル	筆者	内容	形状	ページ数 (ファイル数)
0001	宮本常一語録—その他聞き書きと覚え帖	林道明	①1971年8月1日、当時畑野にあったオンデコ座に宮本常一が寄った際の交歓会のメモ。この時の演目や会食のメニューまで記してある。中継さんも同伴。ムサビの真島グループも参加。宮本は会食中に挨拶。夜中の0時半まで話し合い。翌日、宮本が日小学校に集めた民具を見に来た際に相俣した内容がメモ書きされている。「展示品に「ファンパー」を打つ(早急な実施)」など。②1974年3月8日、竹江組合で開かれた話し合いのメモ。講師に本間隆彦、相沢、真島、「観光」という問題。がテーマ。宿根木から、滝九郎、上、金子屋、くぼ、吉川、町議が参加。③年月日不詳：武蔵野芸術大学教授横口克平氏の講演メモ。④年月日不詳：NHK放送の飛騨の民俗村についてのメモ。⑤1971年9月17日付のNHKメモ。長崎の石崎物語。⑥1971年12月18日付宮本からの葉書。文化庁の調査官の視察希望など。⑦1972年3月17日、於客八屋、「宮本常一」講演会のメモ。	85ノート (後半にメモした用紙を貼り付け)	57
0002	宮本常一文献・資料	林道明	①1981年1月の新聞記事-宮本常一の計報、②葬儀関連、③遺体論集原稿依頼など	スクラップブック	32
0003	宮本常一からの手紙とハガキその他	宮本常一	①民俗博物館開館前後の宮本からの手紙7通とハガキ4通、②その他にTEMからのハガキと手紙1通ずつ、新潟大からの手紙1通、③宮本常一没20周年記念関連の資料(遠夫さんが整理し直した可能性大のファイル)	85透明ファイル	65
0004	1966年-公民館活動ノート-含む宮本常一講演メモ	林道明	①婦人学級、生活改善講習会、広報研修会、家庭教育学級、公民館会議、PTA研究会などでのメモ、発表原稿、関連新聞記事スクラップ、②宮本常一講演録(1966年9月2日：役場だけでなく、倉集落で話しをして回った)	85大学ノート	187
0005	1974年-第1回日本海大学講座-含むおんでこ座佐渡芸術大学構想	林道明	①日本海大学講座での各発表のメモ、②講座開催までの企画・日程、③木下忠のハガキ、④TEMによるおんでこ座にからも佐渡芸術大学構想のたたき台	85綴じ	150
0006	1975年2月-補助帳	林道明	①民俗関連の用語、②1975年2月4, 5, 8日に宮本常一が宿根木を訪れた際の民族博物館指図内容がわかるメモ(含む「南佐渡の漁獲習俗」への指示)、③民俗関係メモ	86メモ綴じ	74
0007	1972年-メモ-原稿類	林道明	①「わがまちの文化財」原稿、②「小木の文化財について」原稿、③「わがまちの文化財」原稿、④NHK番組メモ、⑤郵政資料(「わがまちの文化財」)、⑥文化財と開発メモ、⑦「小木民俗博物館」原稿、⑧「しんえつ」85号、1973年1月(10頁に小木民俗博物館の案内記あり)、⑨鬼木敏などの聞き取り調査メモ、⑩「小比え山案内(かり版)」、⑪「私のライフワーク」『新潟県公民館月報』231号、1972年5月15日、⑫1972-05-17-宮本先生指示メモ(高島君より聞く)、⑬1973-03-20-磯部敏三「宿根木を中心とした石造物について」メモ	85綴じ	122
0008	1973年-年中行事調査および原稿	林道明	①廻船部管の生活(年中行事)のノート、②舟絵島の新聞記事、③「佐渡宿根木の太和船」原稿、④廻船信用金庫の研修パンフレット	85綴じ	66

### 3. おわりに

2021年度の保存作業については、2022年2月と3月にそれぞれ1週間程度の調査出張を残しており、さらなる資料内容の整理を進める。焦眉の課題は、整理された文書類を今後どのように公開していくのかである。この点はデジタル画像データの公開とも同様である。いずれの史資料も貴重文書であり、佐渡市の博物館を統括する「佐渡学センター」と協力しつつ、博物館の運営体制の将来像に合わせて、公開できるよう話し合いを続けていきたい。また、民俗博物館だけでなく、様々な個人所蔵の文書を収集・データ化し、アーカイブ機能を備えた組織を設置していくことを視野に入れている。そのひな形が今回の保存プロジェクトで明らかになるよう今後も作業を続けていきたい<sup>12</sup>。

## 註

- <sup>1</sup> 2020年度の正式タイトルは「ポスト・コロナ期のフィールドワークを通じた教育実践にむけて-新潟県佐渡市における研究・教育活動の総括とともに-」、2021年度は同タイトルに「2」を付け加えたものである。活動内容は本稿で紹介する個人史資料のデジタル化・整理以外に、2020年度は廃校プロジェクト総括執筆、宮本常一写真プロジェクト、ポスト・コロナ期に向けた準備活動、2021年度はこれらに「さどの島銀河芸術祭 2021」の展覧をおこなった。
- <sup>2</sup> 高藤一郎平氏（後述）の談話から。酒宴の席でもメモをしていたとも（中堀：1993：2）
- <sup>3</sup> 宿根木集落の隣の琴浦で行っていた青年学校（夜学）で教えていた林は、1949年1月から青年会と一緒に琴浦村誌を書くことになり、夜学が終わると集落で聞き取り調査を行った。この時のノートが後に役に立ったと記している。林(1981：27-30)。
- <sup>4</sup> 門田岳久・杉本浄（2013）など。林氏（以下、敬称略）と宮本の出会いは1959年8月にさかのぼる。宮本は九学会佐渡調査で南佐渡を歩いた際に、称光寺を訪ねて林氏と雑談を交わした。それから3年後の1962年冬に本格的な付き合いが始まった。きっかけは、小木町、羽茂町、赤泊村の公民館が合同で開いた社会教育研究会の講師に、林が宮本を招いたことにあった。2021年度の資料整理においても、この時の宮本からの電報を含むやりとりや各地で行った講演内容のメモをデジタル化することができた。なお、林が直接宮本と話した最後の機会は1980年5月だった。この時、宮本は小木町の招きで、町の今後について助言するため、町を視察し、その際、称光寺にも泊まっている。翌年1月に宮本は胃癌により亡くなった。
- <sup>3</sup> 同上。なお、厳密に言えばこの民俗博物館は博物館法が適用される登録博物館ではなく、博物館類似施設であり、もともとは「歴史民俗資料館」として出発している。この当時、林の周りにいた若者たちとは、武蔵野美術大学の学生、観光文化研究所の若者、鬼太鼓座の座員、佐渡の若者ということになるが、詳しくは別稿に譲りたい。
- <sup>6</sup> この時の調査・保存作業については、2015年12月5日に佐渡市中央会館で開催された、「佐渡国小木民俗博物館を地域の文化拠点として活性化する事業、博物館活動を通じた地域人材育成事業、資料調査中間報告」(平成27年度文化芸術振興費補助金（地域の核となる美術館・歴史博物館支援事業）)において、「林道明に関する資料調査 中間報告」と題して発表した。
- <sup>7</sup> この時の共同作業については、2019年2月3日に佐渡市が開催した「地域活動合同報告会」において、「林道明と宮本常一の交流から見える地域活性化ー宿根木・称光寺文書からー」と題して発表し

た。この時のパワーポイント資料は、その後、杉本、鍋倉、指田（2021）に掲載。整理・保存作業でデジタル化された手紙や資料については『生活文化研究フォーラム』において紹介のページを設けている。門田(2020)、(2021)、杉本(2020)など。

- 8 2009年より本格的にスタートした「廃校プロジェクト」にはじまる佐渡市における一連の共同研究のこと。門田岳久（現、立教大学）、小西公大（現、東京学芸大学）、それに筆者が引率する学生に、フィールド・アシスタントの大学院生が加わった約2週間の調査実習を毎年夏におこなってきた。2015年より調査の多角化のため全体を「生活文化研究フォーラム佐渡」と総称することになった。2019年度からは年度末に『生活文化フォーラム』（年1回）を刊行している。活動の詳細はホームページ <https://sites.google.com/view/forum-sado/> を参照されたい。
- 9 この時のコロナ禍における佐渡での調査については別に杉本（2021）で述べた。
- 10 これ以外に、コロナ禍による影響と今後の各プロジェクトの内容について関係者との話し合いに時間を費やした。
- 11 「宮本常一写真で歩く鉾山町・相川」と題した写真展を、京町茶屋の展示室を借りて10日から17日まで実施。本展示は2015年度より4年間継続した宮本常一写真のプロジェクトの成果を一部取り入れたものである。本プロジェクトは5年計画であったが、最終年度の2020年度は新型コロナウイルスの影響で中止になった。引き続き2021年度も中止になったが、佐渡博物館と民俗博物館で行ってきた成果展示については、2022年4月に総括写真展を行う予定である。
- 12 なお、一連の保存プロジェクトについては、文学部と文化学部共同のオムニバス授業「知のフロンティア」（第13回2022年1月8日）において「個人史料に見る民俗博物館設立運動」と題して発表した。

#### 参考文献一覧

- 門田岳久（2020）「宮本常一の手紙紹介②」『生活文化研究フォーラム』1、98-99
- 門田岳久（2021）「資料紹介 宮本常一の博物館指導」『生活文化研究フォーラム』2、82-88.
- 門田岳久・杉本浄（2013）「運動と開発 —1970年代・南佐渡における民俗博物館建設と宮本常一の社会的実践—」『現代民俗学』5、33-49.
- 杉本浄（2020）「宮本常一の手紙紹介①」『生活文化研究フォーラム』1、96-97.
- 杉本浄（2021）「コラム コロナ禍の佐渡調査」『生活文化研究フォーラム』2、89.
- 杉本浄、鍋倉咲、指田侑香（2021）「実践報告—称光寺文書の整理について林道明と宮本常一の交流から見える地域活性化—宿根木・称光寺文書から—」『生活文化研究フォーラム』2、94-104.
- 中堀均（1993）「林道明氏を語る」『越佐民具』（林道明会長・山口賢俊先生追悼記念号）、1-2.
- 林道明（1981）「寺の四季—小佐渡の冬、春」『みるあるくきく』177、4-35.